

2002年5月に手賀沼通信の50号を記念して手作りの本を作りました。  
以下はその本の内容を横書きに変換したものです。

---

## 手賀沼通信第五〇号発行記念

### 海外旅行紀行文集

# 未知との遭遇

新田良昭

## プロローグ

暇つぶしとボケ防止にと思って勝手に書いて勝手にお送りさせて戴いている手賀沼通信がいつのまにか第50号を迎えることになりました。今では生活の一部になり、いきがいに近いものになってきています。

50号を記念して何か面白い企画はないかと思案しているうち、ふと今まで書いた記事をテーマを選んでまとめてみてはどうかと思いついてできたのがこの本です。テーマの選定にはいろいろ迷いました。「高齢者の豊かな生活のために」を標榜している以上、福祉関連や健康についてのものを拾い集めようかとも考えましたが、せっかくなら自分が楽しめるものにしたいという気持ちが強く、結局海外旅行特集になってしまいました。

旅行会社ですっかりお膳立てされているパッケージ・ツアーでさえ行く度に新しい発見があります。そこで本の題名をスチーブン・スピルバーグ監督の映画「未知との遭遇」から拝借させていただきました。

100号記念にこの続きを発行するのを今から楽しみにしております。

2002年5月

## 目 次

1	中国の旅	3
2	シンガポール・マレーシアの旅	7
3	タイの旅	11
4	韓国の旅	15
5	台湾の旅	19
6	カンボジアの旅	25
7	ニュージーランドの旅	30
8	団体での海外旅行を楽しむための十カ条	36

# 中国（北京・西安・上海）の旅

（1999年7月12日～17日）

## はじめに

私にとっては3年ぶりの海外旅行、中国は初めてです。

今まで国内海外とも、観光旅行は、社内旅行や親しい仲間との短い旅行を除くとほとんど家内と一緒にでした。今回は家内は都合で家を空けるわけにはいかないので、多少の寂しさと後ろめたさを感じながら一人でバックツアーに参加しました。一人での参加は、素晴らしい景色や美味しい食べ物に出会ったとき、一緒にその喜びを分かち合える人のいない寂しさがあります。一方では同行者の体調や気分を気にする必要がないため、クイックデジジョン、クイックアクションが可能です。どちらもそれぞれ良さがあるなと感じました。

いずれも短い日程で観光地を駆け抜ける慌ただしさでしたが、印象深い旅となりました。写真を入れると格好がつくのですが、デジカメを持っていかなかったため掲載できないのが残念です。

## 中国の街角で

7月12日から17日まで北京、西安、上海を訪れました。H・I・S主催の格安ツアーで、5泊6日、添乗員同行、オール食事付き、オプションツアーなしで9万8千円、一人部屋特別料金は3万円です。北京、西安は各2泊、上海1泊の日程で、参加者は男性4名、女性17名でした。

一人での参加は出掛ける前ちょっぴり不安がありました。ところがお酒の好きな国富さんや若くてしっかりした女性添乗員の山崎さんや北京大学を出たたよになる中国のガイド張さんと意気投合して、西安の夜店をひやかしたり、私の部屋で遅くまで酒盛りをしたり、ガイドがタクシーを飛ばして買ってきた蟹をホテルの近くのレストランで料理してもらって食べたりで、今までのツアーと違った経験をする事が出来ました。

手賀沼通信の読者には中国に何度も足を運んだ中国通の方が大勢おられるので、ちょっと恥ずかしい感じですが、わずか5泊6日の駆け足旅行で感じたことをいくつか書いてみたいと思います。もし見当違いのことがあったらお許しください。

### 1. 人と自転車と車の共存する道路 — 13億人のエネルギー

中国の道路を向こう側に渡るのは命懸けです。横断歩道はありません。信号はまれ

にしかなく、あっても作動していないことがあり、動いていても無視する人がいます。道路には車と自転車と人があふれています。まるでどこから湧いて出たようです。30年前に韓国に初めて行ったときの記憶と似ていました。

車はフルスピードで飛ばします。中央の仕切り線のない道路では対向車が真っ直ぐ突っ込んで来る感じであわやというときに小さい車の方がゆずります。タクシーに乗った人の話では、心臓が止まるかと思った、乗っている間中早く着いてくれと祈っていたとのことでした。

普通のバスのほかにトロリーバスや2階建てバスがあり、窓をあけて走っている冷房のないバスも多くどれも混んでいます。バス停で待っている人は並ぶことをしません。始発のバス停ではバスがまだ停留所に止まっていないのに我先に乗ろうとして大混乱でした。

自転車は専用道路がある広い道では専用道路を走っていますが、そうでない所では車道を走っています。車にすれすれの所を平気で通ります。バスのドライバーは自転車のほうが威張っていると言っていました。日本のように自転車が歩道を走っているのはあまり見かけませんでした。歩道は人が多すぎて走れないのでしょう。

そしてどこへ行っても感じるのは人の多さです。総面積44万平方メートルの広大な天安門広場には毛主席記念堂に入るための人の列が延々と続いていました。1日に30万人以上の人が入場するそうです。私は明の十三陵であまりの混雑に一行とはぐれてしまい大変な思いをしました。万里の長城では仲間の一人が迷ってしまいました。人の多さは道路も同じです。車と自転車と人が交錯していますが、思ったほど事故は多くないようです。

上海では高層アパートが林立し、人々は折り重なって住んでいるのではないかという感じを持ちました。

いたるところで13億人のエネルギーを感じさせられた6日間でした。

## 2. 老人の目立つ中国 — 太極拳とウォーキングや犬の散歩の違い

いつもの習慣で5時前に目が覚めるため、雨だった上海の朝を除いて毎朝散歩をしました。北京ではホテル五洲大酒店の周りの公園を、西安ではホテル西安賓館から小雁塔まで約30～40分を朝のさわやかな空気を楽しみながら歩きました。6時頃にはもう街は動き始めています。日本より早起きのようです。道路掃除のおばさんは昔の日本の2倍くらい長い竹箒で歩道を掃いています。自転車修理のおじさんは歩道にシートを敷き修理道具をならべて開店の準備をしていました。観光バスからは気がつかない街の姿です。

二つの街で興味を引いたのは、中高齢者が早朝から集まって太極拳を楽しんでいることでした。西安の小雁塔は唐の長安時代の建造物でその周りは緑豊かな公園になっています。そこでは幾つもの太極拳グループが思い思いのパフォーマンスを演じていました。一人だけで演じる人から女性だけのグループや20人以上のグループも見ら

れました。若い人はあまりいませんでした。

日本では早朝は、ウォーキングやジョギングをしている人、犬をつれて散歩している人を多く見かけます。中国ではジョギングをしている人はかなり見かけましたが、ウォーキングは少なかったように思います。そして4日間で犬の散歩を見かけたのは1回だけでした。西安のホテルは近くに住宅もかなりあったので犬がいれば散歩しているはずですが、犬を見かけないのは食べてしまうためなのかなどと馬鹿なことを考えたりしました。

街角では何もしないでたたずんでいる中高齢者の姿を多く見かけます。ガイドの張さんの話では中国は定年やリストラの年齢が若く、その分街に中高齢者の姿が多いのだそうですが、なんだか10年後の日本の姿を見るような気がしました。ミニスカートの女性はいますが、茶髪や上げ底靴の若者はいません。少子化の日本で若者が目立ち、一人っ子政策の中国で若者の姿が目立たないのは、日本の若者のほうがわがままなのかもしれません。

### 3. 笑顔のないサービス業 — 半分に値切ってもまだ高い

ツアーで行くと観光の合間におみやげ屋に立ち寄ります。特に中国は観光地のトイレがあまり清潔でなく、トイレ休憩のためにもみやげもの屋によることになります。私の場合は一人での参加で買い物は苦手なため、家内に出発前にお土産は買わないよと宣言して出てきました。ところが1日に何度もおみやげ屋に立ち寄り、つい手持ち無沙汰に日本語の出来る店員と話している内、がらくたをいくつか買うハメになってしまいました。

みやげ物店は値段がついていますが、値切るのが当たり前なのでかなり吹っかけた値段となっています。ところが半分に値切ってもまけるとなるといったいいくらで買ったら安いのか、分からなくなってしまう。最初は3割も値引きをされると得をしたように思いましたが、だんだん疑心暗鬼になってきました。たいした物は買わなかったのですが、おそらく結構高い買い物をして、店員がほくそ笑んでいたのではないかと思います。西安のスーパーで13元（195円）で紹興酒を買いましたが、翌日みやげ物店では35元（525円）の正札がついていました。約2.7倍です。

ところで中国では笑顔あまり見かけませんでした。中国人の文化なのか共産主義時代の遺産なのかは知りませんが、みやげもの屋をはじめとしてホテルでもあまり笑顔にはお目にかかりません。サービス業なら競争に勝ちぬぐために笑顔を見せた方がいいと思うのですが、笑顔を見せるのはなにかマイナスになるのでしょうか。

そう言えば昔仕事でやりあった香港のキャリアウーマンも笑顔を見せることはなかったと記憶しています。中国人の文化なのでしょうか。

### 4. 日本の都市との比較 — 北京と東京、西安と京都、上海と大阪

日本の都市と中国の都市では、北京は東京に、西安は京都に、上海は大阪に似ています。姉妹都市になっている所もあると聞きました。

北京は人口1.3億の国の首都だけあって風格があります。元の大都の時代から明、清の首都であった歴史を感じさせます。地下鉄ですが山の手線のような環状線もあります。整然とした町づくりで、スケールが大きいという印象を受けました。都市の広さ、道の広さ、公園の広さなど東京以上かもしれません。空港はお粗末でしたが、新しい空港を建設中とのこと。また、街が予想以上に清潔でした。裏町は知りませんが、市内の観光地でもビンやカンのポイ捨てはあまり見られなかったように思います。

西安は言うまでもなく唐の時代の長安です。それ以前に秦、漢、隋の首都でもありました。長安の時代はいろいろな国から様々な人種が集まった世界のグローバル都市でした。今その面影はあまりありません。城壁は残っていますが、唐代の遺跡は大雁塔、小雁塔くらいで、京都のほうがよく歴史を感じさせます。空海はよくこんな遠くまで来たなという感じを受けました。しかし秦の始皇帝の兵馬俑坑はすばらしく、中国の偉大さに恐れ入りました。

上海はいかにも新しい町といった感じを受けます。歴史的に見てもあまり古いものはありません。上海租界時代の建物が残っている外灘も中国4千年の歴史から見ればついこの間の建物です。商業都市で、あまり緑がなく、騒々しい感じは大阪そっくりです。しかし北京にない新しさがあります。エネルギーな抜け目の無さがあります。レストランの大ビンのビールも北京では6元（90円）とか10元（150円）でしたが、上海では15元（225円）でした。（それでも中ビン500円の日本よりはるかに安い。また飲み物の値段は東京より大阪のほうが安いので、ここは日本と違います。）

それぞれ性格の違う三つの都市を急ぎ足で見た感じは、中国をもっともっと見てみたいということです。私もすこし中国のとりこになったのかもしれません。

（1999年11月「手賀沼通信第20号」より）

# シンガポール・マレーシア（ジョホールバル・マラッカ・クアラルンプール）の旅

（1999年10月18日～22日）

## はじめに

7月の中国旅行に引き続いて、10月18日から22日にかけて、シンガポール・マレーシア旅行に行ってきました。日本旅行主催、4泊（うち1泊は機内）5日（実質3日）、現地添乗員、全食事つき、オプションツアーなしで、5万6千8百円（別に一人部屋料金1万4千円）のこれまた格安料金でした。

料金が安いだけにスケジュールはきつく、成田を夕方6時に出発、シンガポールのホテルの部屋に入ったのは深夜の1時30分、翌日はシンガポールの市内観光をしたあとマレーシアに入国、ジョホールバルのホテルに1泊。3日目はマレー鉄道とバスを乗り継いでマラッカ市内観光、クアラルンプールのホテルに着いたのは夜10時過ぎ、最終日はクアラルンプール市内観光後、夜9時帰途につき、シンガポール乗り換えで成田に着いたのは朝6時という、まことにタイトで無駄の多い日程でした。

途中、兵庫県と広島県の高校の修学旅行生と一緒にになりました。両校とも我々とほぼ同じようなコースをたどっていたようです。修学旅行で海外に出掛けることがいいことかどうか議論の分かれるところですが、ホテルのロビーをスリッパで歩いていたお土産屋で時間をつぶしているのを見かけたりすると、事前に教師がしっかりと教育しているのかと疑いたくなってしまいました。ただ旅行会社任せのスケジュールでなく、異文化や考え方の違いや政治や経済やその他広く世界を知ることのできる旅行にしなければ、わざわざ外国に出掛ける意味はないのではないのでしょうか。



## 華人経済とイスラム文化

### 1. クリーン・アンド・グリーン — シンガポール

正直なところシンガポールについて語るにはあまりに短い滞在でした。夜中に着いたため名物の屋台に行く時間もなく、熱帯の朝は7時を過ぎてやっと明るくなり始め

るのと雷を伴った大スコールのため期待していた早朝の散歩もできず、街をゆっくり観察するチャンスはありませんでした。おまけに昼間の市内観光は、観光スポットと同じ数の3ヵ所のお土産店に立ち寄るといった買い物おばさんむけのコースになっていました。

観光地でのわずかな時間とバスの車窓からの観察では、パンフレットにある「クリーン・アンド・グリーン」は本当でした。12年ほど前に来たときはバスのヘッドレストのカバーが薄汚れていたのを覚えています。今回は清潔でした。通りは緑の街路樹や植え込みが見事に整備されており、原色のいろいろな花で彩られていました。バスは狭い裏通りを通らないということもあるかもしれませんが、ゴミはほとんど見掛けません。オーチャードロードは近代的なビルと豊かな緑がすばらしい調和を見せていました。

マレーシアとの違いがはっきり感じられたのは、バスでジョホール水道を通過してマレーシアに入ったときです。近代的な建物は古いひなびたものになりました。とたんに道端にゴミが目立ち、緑もあまり手入れされていません。ただマレーシアの名誉のためにマレー鉄道の内車とクアラルンプールの公園や大通りはクリーンだったことを付け加えておきます。その気になってお金と人手をかけるかどうかのポイントなのでしょう。

シンガポールはインフラが整備されています。水道の水が飲めるのも東南アジアではシンガポールだけのようです。通信や国際会議場などは日本以上に完備しているといわれています。今度は家内と共にもっとゆっくり来てみたいと思います。

## 2. イスラム文化と油椰子の国 — マレーシア

マレーシアの首都クアラルンプールには世界一ののっぽビルのペトロナス・ツインタワーがそびえています。文字通り二つのビルで、上の階に行くにしたがって丸みを帯びて細くなっており、最先端はポールとなっています。おそらくイスラム教のモスクを形どったものなのでしょう。その超近代的ビルに被り物をかぶった女性が次々とすいこまれていく風景はちょっと驚きでした。

マレーシアはマレー系45%、中国系32%、インド系9%、原住民少数民族14%の多民族国家ですが、中国系やインド系よりも貧しいマレー系に配慮した政策が取られており、またマレー系民族の宗教であるイスラム教が国教となっています。イスラム教は戒律が厳しく、豚肉を食べてはいけないとか、お酒を飲んではいけないとか、1日5回のお祈りをしなければいけないとか、ラマダン中は夜明けから日没まで飲食してはいけないとか、女性は被り物をしなければいけないなどの決まりがあります。ツアーの一行もイスラム寺院を見学するときは、女性は備え付けの布をかぶるよう注意されました。マレー系の人と結婚するときは男性女性の区別なくイスラム教に改宗しなければならないそうです。宗教をイベントのきっかけとしか考えていない多くの日本人にとっては、理解を超えた世界です。



マレーシア入国のために通過したジョホールバールの税関ではコーランの声がかかっていた。

都市を少し離れるとそこは緑一色の世界です。私たちの通ったマレーシアでは水田を見ることはありませんでした。道の両側はびっしりと油椰子が植えられています。椰子の木というと私たちは背の高い木の先端に葉っぱが茂り大きな椰子の実がぶらさがっているという、ココ椰子をイメージしますが、油椰子はそれと違い、木の高さが低く葉っぱは木の全体を覆っていて実は小さくあまり目立ちません。石鹼や洗剤の原料として、マレーシアの最大の輸出物とのことです。時々バナナやココ椰子を見掛けましたが、ほとんどは油椰子で、マレー鉄道や高速道路からの眺めは単調そのものでした。ただ時々こんな田舎にというところに立派なイスラム教のモスクが立っていました。

### 3. 華人のたくましさ

シンガポールは淡路島くらいの大きさの島に282万人が住み、中国系78%、マレー系14%、その他8%となっています。もともとはマレーシア連邦の一員でしたが、マレーシアのマレー人優先政策に反対して1965年に独立しています。リー・クワン・ユウの強力なリーダーシップのもとに、華人のネットワークと経済力を十二分に発揮させる国家を作り上げました。経済優先と徹底した能力主義が根づいています。

短い滞在期間の間でさえ華人の商売熱心さに感心しました。市内観光のバスガイドとドライバーは観光案内より車内での土産の販売に力を入れていました。ガイドはチョコレートを初めとするシンガポールのお土産の注文を取り、またドライバーのためにライターとキーホルダーを売っていました。また1日のうちにシンガポール3軒、マレーシア1軒のお土産店に案内しました。

マレーシアとつながる道路に車の燃料計の絵と「500」という数字が描かれた交通標識が立っていました。他では見かけることのない標識です。マレーシアではガソリン一リットルが30円位、シンガポールの3分の1の値段だそうです。そのためシンガポールの住民はマレーシアで安い食事を楽しみ、帰りにマレーシアでガソリンを入れて帰って来る人が増えました。シンガポールでガソリンが売れなくなったため、シンガポールを出る車はタンクにガソリンを4分の3以上入れていないと500ドル（約3万2千円）の罰金を取るという標識だったので。安くガソリンを入れようとするほうがっかりしていますが、それを防ぐ方法を考えたシンガポール当局もしっかりしていると感心した次第です。

マラッカからクアラルンプールのガイドも中国系でした。マレーシアではマレー系住民優先政策をとっているにもかかわらず、経済は中国系住民が握っています。大学なども成績順に入るのではなく、マレー系に有利なように入学者数を割り振るようです。マレー系はハンデを一杯もらってゲームをしているにもかかわらず、ハンデなしの中国系にかなわないようです。このガイドも車内で商売を始めました。シンガポー

ルの車内で買った人が多かったのですが、それでも結構売れていました。

中国では自転車の多さに驚きましたが、シンガポールとマレーシアの間のジョホール水道ではバイクの多さに驚きました。朝バイクの大集団がフルスピードでシンガポールに入り、夕方は反対に出て行きます。マレーシアの住民が賃金の高いシンガポールで働くため、命を懸けて通っているのだそうですが、シンガポールからすれば安い賃金で3K職場の人手不足を補っているのかもしれない。

#### 4. マレーシアのトイレ考

マレーシアに入って一番驚いたのはトイレです。マレー式のトイレは和式のトイレのようにしゃがむようになっています。見かけ上和式のトイレと違うのは前面のカバーが着いていないのと、形がひょうたん型になっていることです。しかし最も違うのは使い方です。日本と向きが反対で、洋式のように出口のほうを向いてしゃがまないとモノが流れません。トイレットペーパーがなく、かわりにスチールの蛇腹式のホースがついています。ガイドさんの話だと左手で処理するそうで、左手は不浄の手とのことです。具体的な方法については聞きそびれてしまいました。

マレー鉄道トイレでは水を流すボタンはなくかわりにシャワーが着いていました。シャワーで便器を流しましたが、マレー人は別の使い方をするのかもしれない。

もちろんホテルや一流レストランでは洋式のトイレでした。ただ街のトイレを使うときはティッシュペーパーは必帯です。

海外旅行は文化や風習の違いを知る上で貴重な機会を提供してくれます。今回はそれを実感したシンガポール・マレーシア旅行でした。

(1999年11月「手賀沼通信第20号」より)



# タイ（バンコク・アユタヤ・カンチャナブリ）の旅

（2000年2月22日～26日）

## はじめに

2月22日から26日までタイのバンコクに旅行しました。近畿ツーリストのパック旅行「気軽に行けるタイランド」で、4泊5日（実質は3泊3日）、6万4千8百円の格安料金です。今回はマレーシア旅行で知り合った牛久のウナギ屋のご主人の佐藤さんと一緒だったため一人部屋特別料金は不要でした。ただ、今回も初日はホテルへのチェックインが23日の夜中の1時、最終日は夜中2時のモーニングコール、3時15分ホテル出発という過酷なスケジュールでした。寝ると起きられなくなる恐れがあったため、佐藤さんと部屋でビールを飲みながら出発まで待ちました。けっして気軽には行ける旅ではありませんでした。

メンバーは男性12名女性26名と相変わらず女性が多く、26名の中には12名の若い女性が卒業旅行で参加していました。

タイはシンガポールやマレーシアに比べると、リー・クワン・ユーやマハティールのような強力なリーダーを持たなかったせいか、都市づくり、まちづくりに、はっきりした方向性は感じられません。混沌と猥雑さがあります。しかし一方では市場経済任せの自由と気楽さも感じられました。



## 混沌と喧騒とそして微笑みの国

### 1. タイ人気質「マイペンライ」

「マイペンライ」とは、「気にしない」とか「大丈夫」とかを意味し、タイの国民性を表す言葉です。良い意味にとれば「おおらかさ」となりますが、悪くとれば「いいかげんさ」となります。

バンコク空港についてすぐこの「マイペンライ」の洗礼を受けました。このパック旅行は期間が短く料金が安いうえタイという手軽な観光国のため、日本からの添乗員はついていません。現地のガイドが空港に出迎えてそのあとの面倒を見るようになっています。さまざまな旅行会社のツアーがかち合うため、空港の到着ロビーは旗を持

った出迎えの現地ガイドでごった返していました。ところが我々のガイドは目立たないところでのんびりと出迎えていたのです。こちらから探さなくてはなりませんでした。

このガイドはその後、色々なことで「マイペンライ」を感じさせてくれました。事務的なことや観光スポットでの決まりきったことは話すのですが、バスの中で通常ガイドが解説してくれるその国や都市の歴史、地理、政治、経済、文化、市民生活、観光地の説明などはほとんど省略してしまいました。質問にタイの国土は日本の3分の1と答えてくれましたが、本当は1.4倍もあるのです。不勉強、熱意のなさ、気配りのなさなどを痛感しました。バンコクのエメラルド寺院では、ガイドがちょっとした注意を怠ったため数人の人が迷子になり、その人達は十分な観光ができず出口で待たされてしまいました。「お客さんは初めての人が多いのだから一言注意しておこう」という配慮がなかったのです。

中国やシンガポール・マレーシア旅行で会った4人の熱心な中国系のガイドとは大違いです。それでもなんとなく憎めないのはやっぱりマイペンライなのでしょう。

また、空港からホテルまでは旅行会社のバスで移動しましたが、このバスが曲者でした。マイクが故障していたためガイドの声がよく聞き取れません。そしてホテルに到着する寸前になってバスの電気が切れてしまったのです。バスの中は真っ暗になり冷房は切れてしまい乗降口のドアは開きません。結局運転席をまたいで運転席側から手押し車をステップ替りに使って下車するという散々な目にあいました。翌日からは別のバスに取り替えましたが、先の思いやられるスタートでした。

ただ良いところもあります。街中は雑然としていますが、なんとなくのんびりとした感じがあります。ホテルやお店や観光地で会った人々のにこやかな笑顔も印象的でした。中国で感じた他人を押しつけてでも生きていくという感じは受けませんでした。中国の売店では笑顔はありませんでしたが、タイにはありました。マイペンライの良い面なのでしょう。

## 2. バンコクの交通事情

バンコクは世界に名だたる渋滞の街です。ラッシュアワーにまきこまれると大変です。夜中の12時頃タクシーに乗ったときも混んでいました。私達のツアーの空港の発着が深夜や早朝というとてもない時間だったのは道路事情も考えているのかも知れません。

交通機関は車が主役です。バンコクと市外を結ぶ列車はありますが本数は少ないようです。市内を走る電車はありません。モノレールはありますが（走っているところはお目にかかれませんでした）地下鉄は建設中です。チャオプラヤ川と運河に浮かぶ船も重要な交通手段のようですが利用できる場所は限られています。

道路はバスとタクシーと自家用車とバイクとトゥクトゥクという軽三輪タクシーなどが競い合って走っています。道路が混雑するはずですが、中国で大集団で走っていた

自転車は市内では見られません。東京では健康のため少々の距離なら歩くという人もいますが、ここでは暑いため歩いている人も少ないのです。最高気温は2月でさえ35度、日本の真夏です。私も日中一時間ほど歩きましたが汗だくになりました。よほどの物好きかバス代のない人以外は歩かないのでしょうか。

道路は車本位に作られています。ホテルの前の大きな道路は交差点や横断歩道がなく1キロおきくらいに歩道橋があるだけです。向こう側にわたるのは大変な苦勞を強いられます。歩道橋がないところでは命がけで横切るしかありません。

歩道は障害物にあふれています。街路樹は歩道の端でなくど真ん中に植えられています。車道と歩道の交わる場所も段差が削られることなくそのままです。歩道上は屋台や露天が占領しておりバイクが駐車しています。車道はびっしり車が駐車していて自転車を使えないわけがよく理解できました。

バンコクの歩道上にはもう一つよそで見かけないものがあります。犬です。観光地でもよくみかけましたが、放し飼いの犬が横になって寝ているのです。暑さのせいなのかほとんど動きません。中国やシンガポール・マレーシアでは犬はほとんど見かけませんでしたし、今の日本では人と散歩している犬がほとんどのため、ちょっとめずらしい光景でした。

バイクで気のついたことが二つあります。1台のバイクに3人とか4人乗っているのです。お父さんが運転し真中に子供を2人挟んで後ろにお母さんが乗っています。これぞマイペンライです。4月からチャイルドシートの装着が義務付けられる日本とは大違いです。もう一つはバイクのタクシーです。日本では駅の前に乗り捨て自転車と並んでいますが、タイでは自転車ではなく料金を払ってバイクの後ろに乗せてもらいバス停まで来るのです。

水上マーケットへ行く船に乗ったとき、川の中のごみを拾っている船に気がつきました。タイの遊覧船や水上タクシーは高速で飛ばします。ごみがスクリューに巻付いたら大事故になる恐れがあります。そのためスクリューにごみが巻付かないよう拾っているのです。香港の海でも海中のごみ処理が大きな問題になっていると聞きましたが、同じ悩みがあるのでしょうか。

バンコクでは地下鉄の工事や拡張工事などでいたるところで道路が掘り返されています。やかましさと埃っぽさとが街を覆っている感じです。タイは経済危機を脱しつつあり、活気が戻ってきたのかもしれない。

### 3. 国民のよりどころ — 仏教

タイは国民の95%が仏教徒です。インドからスリランカをへて伝わった小乗仏教で、中国を経て日本に伝わった大乘仏教とは違い、厳しい戒律を守りつづけています。正午以後は食事をしない、女性に触ってはならないなど、227の戒律を守りながら修行するタイのお坊さんは、国民から特別な尊敬を受けています。

我孫子在住でスリランカからの留学僧の話では、家族の中から僧侶を出すのは大変

な名誉だそうです。お坊さんは食事やお金の寄進を受けて生活には困らないとのこと  
です。また僧侶になったあと僧侶をやめて結婚するのは自由だけどそういう人は人間の  
的に評価されないと書いていました。

お寺は日本と違って金色に輝ききらびやかです。どこへ行っても一番目立つのはお  
寺です。マレーシアのイスラム教のモスクとの違いは、モスクが形のあるものの装飾  
を嫌い、幾何学的な紋様だけなのに対して、お寺は仏像を始めとして人や動物の像で  
あふれています。

街中には、いたるところにミニチュアのようなお寺があり、飾り付けがされていま  
した。昔の日本でもお稲荷さんやミニ鳥居などを見かけましたが、同じ感じなのかも  
しれません。タイの人の仏教に対する信仰の深さを感じられました。

#### 4. 観光資源となった「戦場にかけた橋」

1957年に製作された「戦場にかける橋」という映画がありました。7部門でア  
カデミー賞を受けたデビッド・リーン監督の名作です。主題歌はクワイ河マーチでし  
た。ウィリアム・ホールデン、アレック・ギネス、早川雪州が競演しました。タイとビ  
ルマの直通鉄道建設の最大の難所クワイ河にかかる木の橋を日本軍は連合軍の捕虜を  
使ってなんとか完成させたのですが、収容所から脱走したウィリアム・ホールデンふん  
する米海軍少佐に列車もろとも爆破されてしまうという結末でした。

そのクワイ河にかかる橋が観光の目玉になっているのです。橋はバンコクからバス  
で約3時間のところのカンチャナブリという町にあります。鉄橋にかけかえられ橋の  
上を列車が走っています。観光ルートはバンコクからカンチャナブリまで行って、橋  
の上を徒歩で往復し、それから鉄橋を通過クワイ河沿いに走るローカル列車に1時  
間半乗車、ワン・ポーまで行き、そこでタイ式の食事をしてバンコクに帰るとい  
うものです。私達がたどったカンチャナブリから先にバスでワン・ポーへ行き、帰りが列車と  
いうルートもあります。

感心したのはこのような1日がかりのルートを考え、食堂などの受け入れ態勢を整  
備し、それを旅行会社とタイアップし、大量の観光客を送りこんでいることです。今  
度も欧米の観光客が日本人よりも大勢来ていました。単に橋を見るだけならわざわざ  
バンコクから3時間もかけては来ないでしょう。いろいろ組合せて1日がかりの観光  
ルートとして開発したわけです。アイデアを考えたのは欧米人だそうです。

カンチャナブリには連合軍の死者の墓地と日本軍の死者の慰霊塔がありました。連  
合軍の墓地はイギリスの援助を受けきれいに整備されていました。1人1人金属板で  
墓標が作られ、氏名や年齢や所属部隊の名が刻まれていました。日本人の慰霊塔は狭  
いエリアに大きな慰霊塔が建っているだけの殺風景なものでした。経済大国の日本と  
してはあまりに寂しい慰霊塔でした。政府の考え方の違いが見事に出ていました。

(2000年4月「手賀沼通信第25号」より)

# 韓国（釜山・慶州・ソウル）の旅

（2000年10月10日～13日）

## はじめに

昨年からはじめた、中国、シンガポール・マレーシア、タイに続くアジア旅行の4回目として、10月10日から13日まで3泊4日で韓国に行ってきました。近畿日本ツアーリストの5万9千8百円の「韓国周遊大満足の4日間」のパックツアーで、同行者はシンガポール・マレーシア旅行で知り合った牛久のウナギ料理店のご主人佐藤さんです。お互いビールが何よりも好き、大変気の合う旅の友人です。

総勢16名、うち12名はご夫婦で全員高齢者でした。

食事の質があまり良くなかったこと、例によって観光よりも買い物重視のスケジュールで、「大満足」には程遠いツアーでしたが、この値段ではこんなものと割り切れればたっぷり飲めて気楽な旅でした。



## 29年ぶりの韓国旅行

### 1. 日本にない緊張感にあふれていた朴正熙政権下の韓国

私にとって今度の韓国旅行は3度目です。初めて韓国に行ったのは、今から31年前、1969年のことです。32歳の時でした。韓国アイ・ビー・エムが三星グループの一つ、東邦生命にコンピュータのセリングをしていたのですが、そのサポートの要請が日本アイ・ビー・エムに来ました。たまたま暇だった私に白羽の矢が立ち、ソウルに15日間くらい滞在した記憶があります。

2度目はその2年後、東邦生命にシステム/360の導入が決まり、またまた日本アイ・ビー・エムにシステム設計のサポートの要請が来たのです。そのときはたしか25日くらいソウルで過ごしました。

何しろ30年くらい前のこと、定かでないところがありますが思い出しながら記憶をたどってみましょう。

当時海外に行くのは簡単なことではありませんでした。パスポートは海外へ行く1回ごとに取る必要があります。当然ビザも必要です。日本はドル不足でしたので、その旅行や出張がどうしても必要だということの関係省庁に申し出る必要があります。それが妥当な場合、初めて1人千ドルの外貨の持ち出しが認められたのです。1ドル

360円の時代でした。私の場合は韓国アイ・ビー・エムからのサポート要請と航空券や滞在費は韓国アイ・ビー・エムが持つというテレックスがあったため比較的簡単にOKとなりました。

当時の韓国は朴正熙が大統領でした。朴正熙は1963年にクーデターで政権につき、1979年に暗殺されていますのでちょうどその真ん中頃の絶頂期でした。日本では佐藤首相の頃です。

海外出張が珍しい時代で家内と会社の同僚がわざわざ羽田まで見送りに来てくれました。飛行機はたしか百人くらいしか乗れない初期のボーイング737でした。

金浦空港について驚いたのは入国時にスーツケースの中を開けられ厳しくチェックされたことです。日本から持っていった週刊誌は係員がページをめくって政治や文化などで韓国の主義に合わない判断された部分は容赦なく破られました。

当時韓国は北朝鮮と板門店を挟んで絶え間ない緊張に包まれていました。夜12時から朝4時まででは外出禁止です。その時間に歩いていると警察に連行されます。酒場で飲んでいても11時半頃には通りに出てタクシーを掴まえる必要があります。バーの女の子も一緒です。帰る方向が同じだと相乗りもOKです。日本のバブル期も赤坂や新宿でタクシーを掴まえるのは大変でしたがソウルの場合は文字通り必死の奪い合いとなっていました。

写真を撮れるところは限られていて、政府の建物や公共機関や軍事施設は撮影禁止です。大統領府の青瓦台の方向はたとえ青瓦台が写っていなくても駄目でした。南山の展望台から市内の写真を撮るのにも神経を使いました。

お客様を訪問して話をしている最中に突然サイレンがなり驚いたことがありました。防空演習でした。そのときは指示された通りに行動することが必要でした。迷彩服を着た軍の兵士や警察官が市民に命令していたように覚えています。

最初に行ったとき韓国アイ・ビー・エムは40人くらいの小さな組織でした。どの場所にあったかは全く覚えていません。第二次大戦後24年しかたっていないので、40歳台以上の韓国人は日本語の読み書き出来、アイ・ビー・エムでもお客さまでも言葉の心配はありませんでした。2年後に行ったときには、韓国アイ・ビー・エムは当時最先端のKALビルに移っていて、社員が200人以上に増え若い人が多くなって苦手の英語を話す必要がありました。お客さまでは2年前と同じように日本語で通しました。東邦生命でシステム設計の話をすすめるときは、年配の人と日本語で話をする、年配者が若い人に韓国語で通訳するというやり方で問題なく仕事ははかどったのを覚えています。

当時韓国は「漢江の奇跡」といわれた経済成長期に入る以前の状態で、表向きはともかく経済面では必死に日本を見習おうとしていました。今ソウルの政庁の中心地となっているヨイドはまだ単なる川の中州でしたし、しゃれた地区になっている漢江の南側はほとんど開発されていませんでした。



最初に行った時は、日本では発表後4年たったシステム／360が順調に入り始めていましたが、韓国ではまだ1401しか導入されていませんでした。韓国アイ・ビー・エムは政府機関や大手の企業に売りこみの真最中で、私も東邦生命の仕事以外に政府の統計局の1401の故障のお詫びに政府高官に引き合わされたり、メーカーで講演をさせられたりしました。日本から専門家が来たというふれこみで、保険業務以外はあまりわからない若造が「ちょうどよいからとにかく連れていこう」とうまく利用された感じでした。

2年後に行ったときは事情が大分変わり、韓国社会も成長のあとが見られました。それでも、三星グループ本社の役員会に引っ張り出されて東邦生命のシステム設計について話をさせられました。トップの人には、コンピュータシステム構築の仕事が理解できず、「毎日、何人もの社員が部屋にこもってこそこそ仕事をしているのは何だ」という声が上がっていたようです。ビルの建築にたとえて話をしたのを覚えています。

つい昔話が長くなってしまいましたが、今回の韓国旅行で韓国がどう変わったかを実感するのが楽しみでした。

## 2. 日本と変わらなくなった金大中政権下の韓国

ところがどこまで変わったかを実感する機会は残念ながらあまりありませんでした。

今回の日程は、初日に釜山に直行して市内見物のあと釜山泊、2日目は慶州までバスで行って市内見物のあと慶州泊、3日目は慶州から特急列車セマウル号でソウル入りし、市内見物のあとソウル泊、4日目はただ帰るだけというものでした。費用を安くするため、成田は午後出発、ソウルは朝出発です。市内見物は買い物重視、泊まるホテルはいずれも五つ星でしたが、いずれも市内からはずれたリゾート地でした。

夜、ホテルから出て市内見物というわけにはいきません。途中会う人といえば、日本語の達者なお土産店やホテルや日本人向けのレストランの従業員です。バスの中の現地ガイドの話が唯一の情報源でした。ソウルの名物垢すりエステにも行ってみましたが、看板に日本語で「外国人専用」と書いてありました。パックスツアーの限界なのかもしれません。

ソウルではできるだけ免税店から出て市内を散歩するようにしていましたが、あまり時間がなく街角を眺める程度でした。

とりあえず短い時間と少ないチャンスで感じた範囲の韓国の変わりようをまとめてみましょう。

一番印象の深かったのは山々に緑が戻ったことです。韓国の冬の暖房は床暖房オンドルです。以前はその燃料は薪でした。山の木はオンドルの燃料とするため伐採され、飛行機から見下ろすと禿山ばかりでした。ところがセマウル号から眺める山々は緑が一杯でした。燃料は石油に置き換わったとのこと、禿山は植林されていました。背の

低い木が多かったのはまだ十分育っていないのかもしれませんが。日本と違って杉でなく松が多いため、仏国寺の参道も大変明るい感じがしました。

31年前は1ウォンは1.3円でした。円よりウォンが強かったのです。今では1ウォンは約0.1円です。円の価値はウォンの10倍です。いかに韓国のインフレが激しかったかということがわかります。31年前、家を借りるときは家主にまとまったお金を預ければ家賃はただと聞いたことがあります。家主は預かったお金を銀行や頼母子講で運用、数年後に預かった金額をそっくり返しても、数十パーセントの運用利子と数十パーセントのインフレのダブル効果で家賃分が稼げるのだと言っていました。しかし今は物価は落ち着いているようです。

車は「現代」「大宇」「起亜」などの韓国の国産車です。日本製の車はほとんど見かけません。前回雨の日にワイパーの故障した日本からの輸入車に乗って怖い思いをしましたが、今では少なくとも外見上は韓国の車は日本の車と遜色はありません。違うのは右側通行のため、ハンドルの位置が逆になっていることくらいです。

ソウルの町並みも東京と同じように近代的になりました。高層ビル、地下鉄網、高速道路網、通信インフラなどそろっています。新幹線も建設中、ワールドカップサッカーの会場も突貫工事中でした。人々の態度や表情も日本と同じように平和です。朴政権下ではご法度だった政治に対する批判も今は全く自由のようです。バスガイドは金大中大統領に対する批判を繰り返していましたが、ノーベル平和賞が発表されたのは私達が帰国したその日のこと、ソウル滞在中だったらどんな発言が聞けたかと残念に思いました。

最後にソウルにあって日本にないもの、というよりアジアの各都市にあって日本にないものは、日本人の観光客をベルトコンベアーのように次から次へと呼びこみ、市価よりはるかに高い値段で物を売る商法です。東京では見かけない風景です。もちろん東京で日本人相手ということはありませんが、日本人を外国人に置き換えて考えてみてもそのような光景にはお目にかかれません。やっぱり日本人は特別、特に買い物好きは特別というしかありません。恥ずかしいことです。

今回の旅行ではバスガイド以外の韓国の人との交流はありませんでした。次回はパックスツアーでなく前回のように韓国の人と落ち着いて話し合う時間が持てるような旅行をしたいと考えています。そのためには忘れてしまったハンデルを勉強しなおすことが必要かもしれません。

(2000年11月「手賀沼通信第32号」より)



# 台湾（花蓮・台北）の旅

（2001年4月16日～18日）

## はじめに

4月16日～18日の3日間、アジアシリーズ第5弾として台湾に行ってきました。タイや韓国のツアーと同じ近畿日本ツーリストのクラブツーリズムの旅で、コース名は「花蓮・台北人気の2都市廻り3日間」、2泊3日、4万9千8百円の格安料金のツアーです。同行はいつもの牛久の佐藤さん、総勢10名の一行でした。



## 台湾紀行

### 1. 司馬遼太郎の「街道をゆく — 台湾紀行」より

今回の旅行は最後の1日が排尿がストップするというアクシデントにみまわれたため、正直言って台湾旅行そのものの印象が希薄になってしまいました。しかも戻った翌日から病院通い、入院、手術と続いたため、旅行そのものについて皆さんにお伝えるメッセージがなかなかわいてきません。そこで退院してから台湾についてゆっくり振り返るため、私の好きな司馬遼太郎氏の「街道をゆく - 台湾紀行」を読み返しました。ここでは司馬さんの文章をお借りして台湾を語ってみたいと思います。「街道をゆく — 台湾紀行」はシリーズ全43冊の40冊目で司馬さんが亡くなる2年前に完結しています。

今、日本は中国や韓国から教科書問題で書きなおすよう厳しい注文を受けています。一方、台湾も日本の支配を受けた歴史がありますが、日本に対しては好意的といわれています。

司馬さんも日本が台湾を統治したことを台湾の人々が評価していると書いています。『1895年から50年間、台湾は日本領だった。近代日本に辛口の邱永漢氏でさえ、台湾島の50年について、「もしそうでなかったら、台湾島は、そのそばの海南島

のようでありつづけたろう」という意味のことをいう。』

日本は台湾の近代化につくしました。中国や韓国と違って、台湾では日本語をしゃべる会などが出来て日本統治時代を懐かしむ人もいます。

『児玉源太郎と後藤新平が日本領時代50年の台湾の行政の基礎をつくったといっている。』

『児玉の台湾における女房役となった後藤新平は、人材を探しては、台湾に送った。新渡戸稲造もそのうちの一人だった。』

児玉源太郎はその後日露戦争の陸戦大勝利をもたらした人で、後藤新平は関東大震災当時の東京市長、新渡戸稲造は五千円札の顔のいずれも傑物です。

『日本時代以前の台北の市街は、清国のままの純然たる中国式だった。城壁・城門が設けられていて中国式の民家が軒をつらね、街衢はせまく、当時の北京でさえそうであったように、台北でも汚水が路上を流れ、不衛生そのものであった。』

『全島に、防疫運動も展開した。また公設の魚菜市场と製肉場もつくった。最初はこのからの収益をすべて衛生費にあてるというやり方をとった。この財源捻出のやり方は後藤新平のアイデアで、また「公共衛生費」という予算費用のたてかたも、財政学上、独創的なものであったらしい。』

『いうまでのないことだが、後藤、高木、浜野らの努力で、台湾における上下水道の整備は、日本内地よりはるかに早い時期に完成した。』

ところが戦後になって蒋介石の国民党が毛沢東の共産党に敗れて台湾に逃げてきてから、事情が変わってきます。台湾の町は歩道があまり整備されていません。店の前には歩道らしきものがありますがとても歩きにくく出ています。司馬さんは次のように書いています。

『夜、商店街の歩道を歩いた。ここでいう歩道とは、商店のならばの軒先の道のことである。ここばかりは車が襲ってこない。が、歩道も、歩行に安らかとはいえない。「ここは、一段高くなっていますから」産経新聞台北支局長の吉田信行氏が、先導しつつ声をかけてくれる。「ああ、今度は一段低くなりました」山を歩いているようである。とくに、近眼に老眼がまじって足元への距離のつかみにくい家内には、この親切はありがたかった。いうまでもなく、歩道は公共のものである。が、台北では商店ごとの私が優っている。自店の都合で店頭の歩道を盛りあげたり、そのままであったりする。「戦前の台北では、ありえないことでした」と、ある老台北が、日本時代のことをほめて(?)くれた。「蒋介石氏がきてから大陸の万人身勝手という風をもちこんだんです』

蒋介石と共に大陸からやってきた人達「外省人」は、元から台湾に住んでいた「本省人」を支配しました。「本省人」は多数派とはいえ、被支配層で、発言力が弱いだけでなく、弾圧されたり、殺されたりしました。1947年2月28日に起こった民衆弾圧では、数万の人々が虐殺されたといわれ、「二・二八事件」として語り継がれています。司馬さんはこう書いています。

『大陸から、中華民国がやってきた。当初、台湾の多くのひとびとはこれを光復（祖国復帰）として歓呼の声をあげ、青年たちは、孫文の「三民主義」を論じたり、きそって国語（北京官話）を学んだりした。やがて失望した。やってきた陳儀以下の軍人・官吏は宝の山に入りこんだ盗賊のように略奪に奔走し、汚職のかぎりをつくした。「犬（日本人）が去って豚がきた。犬は小うるさいが、家の番はできる。豚はただ食って寝るだけだ。」という悪口が流行した。』

私達は花蓮では中信大飯店（ホテル）に泊まりました。そして翌日は台湾屈指の景勝地「太魯閣峡谷」を観光しました。司馬さんの「台湾紀行」には当時総統だった李登輝氏との花蓮でのふれあいを書いています。司馬さんと李登輝さんとは肝胆相照らす仲だったようです。お二人が大変身近に感じられたのでちょっと紹介させていただきます。

『そのとしの1月8日の夜8時、李登輝総統の官邸で、お茶の馳走にあずかった。李登輝さんの応接室では、話が弾んだ。やがて時間がきて私が立ちあがると、李登輝さんがあわてて制した。「もうすこし」しかし、遅くなれば、この人の健康をそこねる。私は4月にはまたきます、といった。「今度は東部の山地へゆきますが」「じゃ、4月にはボクが案内する」と、この人は旧制高校の日本語でいった。冗談じゃない、こんなえらい人に案内されてはたまらないと思いつつ、同時に、アジア的な威厳演出とはほど遠いこの人の人柄におどろかされた。』

『花蓮のまちには、4月9日に来た。翌日、市中を歩き、納骨堂などにのぼった。その夜、李登輝さんが、花蓮の私どもが泊まっている花蓮中信ホテルにやってきた。なんだか、いったん言葉に出したら必ずやるという性分の人らしくて、おかしかった。夫人の曾文恵さんも、ご一緒だった。この夫妻は、一人息子の李憲文さんを若い癌で失っている。その未亡人の張月雲さんと、遺児である12歳の李坤儀さんも一緒だった。要するに当方に気をつかわせないようにという配慮からのようで、家族旅行の途上という形をとっていた。花蓮には、太魯閣という断崖と絶壁と急流の景勝がある。李登輝さんは、明朝、李坤儀嬢にその景勝を見せたいという。私も太魯閣ゆきを誘われたが、景勝よりも朝寝のほうがいい、とわがままを言っとうけ容れてもらった。』

## 2. 看板の読める台湾のまち

台湾でも多民族国家中国の標準語である「普通話」が使われています。「普通話」は、司馬さんの文章の中では「北京官話」となっていますが、中国の首都北京に住む教養ある階層が日常使っている言葉が母体になっています。そして中国では公式の文字としては「簡体字」とよばれる、中国で独自に簡略化された文字を使っています。この簡体字は私達日本人には読めない文字です。（この文章の中でご紹介しようといういろいろ試みてみましたがワードではうまくいきませんでした。インターネットのブラウザーやメールの文章では表示できるのですが、ワードには中国語簡体字がありません）

ところが台湾では「繁体字」とよばれる漢字のルーツが使われています。日本で戦前使われていた漢字です。例えば「学」は「學」、「国」は「國」、「鉄」は「鐵」、「会」は「會」などです。日本でも当用漢字だけの教育を受けた若い人はだんだん読めなくなるかもしれませんが、私達一部戦前の教育を受けた者には十分読めます。

台湾の町の看板は全部読めました。日本語の「自動車」が「汽車」で日本語の「汽車」が「火車」などという一部意味の違う言葉がありますが、ほとんど意味もわかります。看板が読めるということは歩いていても大変な安心感を与えてくれます。いままで中国、マレーシア、タイ、韓国などに行きましたがあまり看板が読めません。看板が読めないとなんとなく居心地が悪く不安なものです。台湾が日本人にとって親しみやすいのは、対日感情のよさとともに文字が読めるということだと感じました。

今回の現地のツアーガイドは珍しく60歳台の男性でしたが、中国の簡体字について聞くと、「共産党が勝手に文字を変えてしまったので自分達にも読めない」と憤慨していました。中国では昔の書を研究するなら日本にいけといわれているそうです。本当は台湾のほうがむいているのかもしれませんが。

### 3. アジア各国のお国事情・旅のあれこれ

この2年間の間にアジア6つの国と地域(中国、シンガポール、マレーシア、タイ、韓国、台湾)を回りました。短期間の表面的な観察ですが、それぞれのお国事情について触れてみたいと思います。

#### 道路・交通事情

どの都市も道路は混んでいます。人間でなく車が主役です。韓国以外は日本車が一番目につきます。シンガポールは道路によって時間によって自動的に料金が課せられるロードプライシングが採用されています。

中国は自転車の大群が幅を利かせています。シンガポールには朝マレーシアからバイクで労働者がどっと入ってきて夕方には帰っていきます。タイもバイクが多く、2人乗り3人乗り4人乗りでマイペンライ(なるようになれ)と走っています。台湾はほとんどスクーター型のバイクです。中国とタイと台湾は大通りを除くと歩道が駐車場のようになっっていて、まともに歩くことができません。

#### 列車

中国以外では列車を利用する機会がありました。マレー鉄道、韓国のセマウル号、台湾の自強号とも電車でなくジーゼルエンジンですが、日本の在来線の特急によく似ており快適でした。スピードも同じ様な感じですが、社内販売もあります。セマウル号では食堂車にいました。タイではローカル線の普通車に乗りましたが、「戦場にかかる橋」の上を通るといことが売り物で、冷房もなく窓をあけて走りました。地元の人が多くかなり混んでいました。

#### 宗教

どの国も仏教が広く根づいています。ただどの国のお寺も日本のお寺とは違って鮮

やかな色彩に満ちています。けばけばしいといったほうが当たっているかもしれません。タイのお寺は金色で彩られていました。また、マレーシアではイスラム教が、中国と台湾では道教が大きな力をもっていました。マレーシアにはヒンズー教のお寺もありました。イスラム教のモスクは幾何学模様、ヒンズー教の寺院は動物や人間の彫刻が特徴です。

### マッサージ

シンガポール・マレーシア旅行以外は夜のオプションツアーにマッサージのコースがありました。

中国と台湾は足つぼマッサージで足の裏を中心にもんでくれます。なかなか気持ちのいいものです。靴下を脱いでズボンをまくるだけでよく、お手軽で料金も安くあがります。

タイ式マッサージはマッサージ用のガウンに着替えた後、私達仲間は男性も女性も同じ部屋に入れられ、若い女性が上に乗ったり、下から膝の上に乗せたり伸ばしたりでかなり激しいマッサージでした。膝や腰の悪い人はやめた方がいい感じです。

韓国式エステはバラエティに富んでいます。日本のお風呂と同じ素っ裸で、まず穴倉式のサウナに入り水風呂に入った後、台の上に乗せられて、お湯をかけられたり、葉っぱでたたかれたり、もまれたり、まるで俎板の上のマグロといった感じです。当然マッサージ師は異性ではありません。時間も一番長く費用も一番高かったです。

ただいずれもオプションツアーだったため、日本人専用といった感じの場所で割高だったような気がします。現地の人を利用するようならきっと安くいけると思えます。

### ホテル

いずれのツアーも格安料金だったため、市内の中心にある超一流のホテルではなく、市の中心から外れたところか、リゾート地の一流ホテルでした。設備や用度品は一応そろっているところが多かったのですが、なぜか韓国だけは歯ブラシなどの洗面用品がありませんでした。冷蔵庫の中の飲みものは日本のホテル並の高い料金です。セブンイレブンが近くにある場合はビールを買ってきて冷やして飲んでいました。セイフティボックスが部屋の中にあるホテルは少なく、2日以上逗留するときはフロントのセイフティボックスに預けました。どこのホテルも観光客用に市内の地図を用意しています。もらっておくと便利です。

### 両替

両替は現地のツアーガイドが現地通貨を用意しています。今までの経験では、日本で両替していくのが一番損でした。日本から添乗員がついて行かない場合は現地の空港で現地のガイドが待っている場所に集合するのですが、なかなか現れない参加者がいます。たいてい空港の両替所で両替しているため遅れるのです。みんなの迷惑になるばかりでなく、ガイドの用意している現地通貨より交換レートが悪く損をすることが多いようです。

## 物価

物価は日本より安いのですが、免税店などツアーで案内される日本人用の店は決して安くありません。またツアーで食事をする際のビールも台湾の場合はどこも大瓶1本6百円で決して安くはありませんでした。ただ2年前の中国は90円から225円で安かったのを覚えています。

(2001年6月「手賀沼通信第39号」より)





# カンボジア（シェムリアップ・アンコールワット）の旅

（2001年11月5日～9日）

## 感動のアンコールワット

### — 遺蹟と豊かな自然と人々の貧しい生活

#### 1. ちょっと勝手が違うカンボジア旅行

2001年11月5日から9日まで、カンボジアのアンコールワットに行ってきました。

今回のアンコールワットは最近の6回の海外旅行のうち、初めて男性のほうが多く、男性8人、女性5人で、夫婦は2組だけ、あとはみんな一人旅でした。

カンボジアの旅行には今までのアジア旅行と違ったポイントがいくつかありました。

日本からカンボジアへは直行便がありません。他国のどこかの都市を経由していく必要があります。日本からのパック旅行はバンコク経由がほとんどです。またカンボジア入国にはビザが必要です。いつもビザなし旅行になれているため、よけいな費用と時間がかかります。そしてカンボジア入国カードは記入する項目が他のアジア諸国のカードと比べるとかなり多く面倒です。なんとなく戦乱時の制約から抜け出していない感じです。

良い点としては免税店に一度も立ち寄らなかったことです。買い物旅行ならともかく、観光に免税店は時間の無駄です。多分まだシェムリアップには免税店のような観光施設が出来ていないのでしょう。また観光地で集合写真やスナップ写真を撮られることもありませんでした。他の国でも必ずしも強制ではないのですが、出来あがりを見るとつい買ってしまい、いつも高いと後でぼやいていました。

ただカンボジアの経済という観点から見ると、観光客からせつかくの外貨獲得のチャンス逃しており、まだまだ観光業にも徹しきれていないと感じました。

カンボジアでは日本の強い円がそのままでは使えません。アジアでは珍しいことです。カンボジアの通貨はリエルですが、観光客は米ドルのほうが通用します。物やサービスの値段はドルです。これも内戦とそれに続くUNTAC（国連カンボジア暫定統治機構）時代の名残ではないでしょうか。

今回の旅行は、近畿日本ツーリスト主催のパック旅行「アンコールワット世界遺産紀行5日間」11万4千8百円で中国旅行以来久しぶりに日本から添乗員が同行です。アジアのパック旅行は添乗員が同行せず現地の添乗員が現地の空港まで迎えに来て出



発まで面倒を見る場合がほとんどです。日本から添乗員が同行する理由を添乗員に聞いたところ、国際線の乗り継ぎがあるためという返事が帰ってきました。行きも帰りもタイに1泊し、タイからアンコール遺蹟観光のベースとなるシェムリアップまではバンコク・エアウェイズの国際線に乗り継ぐ必要があります。そのチェックインのわずらわしさや、シェムリアップやアンコール遺蹟群は危険度1（注意喚起）ですが、カンボジアの大部分は危険度2（観光旅行延期勧告）の状態にあるため念のため添乗員がついていくのかもしれませんが。いずれにせよ前回のタイでは運悪くマイペンライ（いいかげん）な現地ガイドで懲りているだけに心丈夫でした。

## 2. 肌で感じた同時多発テロの影響

今回のツアーでは9月11日にアメリカで起きた同時多発テロの影響を各所で感じました。

まず参加者です。アンコール観光はちょうど雨季が開け乾季に入るベストシーズンです。ツアーの人数は今回13名、もしテロがなければもっと多かったのではないのでしょうか。また参加者の何人かは、別のところを申し込んでいたのにツアーが催行中止になったので、アンコールツアーに変えたという人でした。

成田やバンコクやシェムリアップの入出国の手続きは今まで経験したことがないくらい空いていました。せいぜい数人待ちであつという間に通り抜けました。機内持ちこみや手荷物の検査はいつもより念入りにやっていたようですが、人数が少ないため帰りのバンコックで多少並んだくらいで、ほとんど待ち時間はありませんでした。それに日本の入出国カードが廃止されたことも時間短縮に役立っているのでしょう。

バンコクからの帰りの飛行機は欧米への乗り継ぎに便利な時間帯だったせいかほぼ満席でしたが、バンコクまでのジャンボは半分くらい空席がありました。真中の4人掛けの席を2人で使い横になることができました。機内のフライトアテンダントのサービスもいたれりつくせりでした。バンコクからシェムリアップまでのボーイング717は、120～130乗りの小型機でしたが、やはり約半分くらい空席が目立ちました。

アンコール遺蹟やバンコクの空港で何組かの白人のツアー団と一緒にりましたが、声をかけるとドイツやフランスやカナダの団体で、アメリカのグループは見かけませんでした。アンコール遺蹟でのガイドの言葉も、英語はあまり聞こえてこず、日本語やドイツ語やフランス語や韓国語が響いていました。

航空会社や観光業者の大変さが実感できました。ただ旅行する立場からすると、大変申し訳ないことですが、逆に楽な旅行をさせていただいたと感じています。

## 3. カンボジアの貧しさは戦争の影響

毎日アフガニスタンの国民の惨状がテレビに映し出されて私達の心を痛めています。カンボジアでも内戦の後遺症がいたるところに見られます。

カンボジアは1970年ロン・ノル将軍によるクーデターでシアヌーク殿下が国家元首を解任されて以来、ベトナム戦争介入、ポルポト政権による虐殺、内戦などで国土は荒廃し、大量の難民が発生、国民は疲弊の極に達しました。1991年、UNTAC（国連カンボジア暫定統治機構）が設立され、その活動により1993年選挙が実施されて、約23年ぶりにシアヌーク国王を国家元首とする新生「カンボジア王国」が誕生しました。

日本は1990年代の約10年間「失われた時代」を迎えまだそこから脱していませんが、カンボジアには実に23年間のいわば「失われた時代」があったのです。

安定した政治と平和がない以上外国資本は入ってきません。他のアジア諸国が外資導入で目覚ましい発展をしている間、カンボジアは戦火のど真中でした。発展の基礎となるインフラの整備や国民の教育まではとても手がまわりませんでした。

アンコールの遺蹟のある観光地は地雷が除去されていて安全ですが、少し奥地に入るとまだ地雷が残っており危険なようです。アンコールワットの遺蹟の一部には弾痕が残っていました。ポルポト派がアンコールワットを占領し仏像の首を切ったり、石に彫られた女性の顔をつぶしたりしたとも言われています。戦後の上野公園でよく見かけた傷痕軍人のように、遺蹟のある場所に行くと片足や片手をなくした大人が物乞いをしていました。

カンボジアの人々の生活は私が訪れたアジアの国の中ではもっとも貧しいものでした。市街地の真中は別として、シェムリアップからアンコール遺蹟に向かう道の両側の住居は、ほとんどが丸太で組んで屋根をトタンか萱でふいた高床式の家です。1部屋か2部屋で外から家の中が丸見えです。床もござのようなものを敷いている感じで、家具といったものはほとんどありません。電気がない家が多く、当然のことながら電化製品はありません。はだしや素っ裸の子供たちが目につきました。

シェムリアップの道路は一步中心街から離れると舗装がとぎれます。歩道はほとんどなく信号は一つもありません。街路灯はなく商店の明かりがたよりです。夜は出歩かないように注意されました。建物の高さはせいぜい4～5階建てが最高でホテルや官庁などです。

ガイドの説明では、朝食を町の屋台で食べている人が多いは、冷蔵庫がほとんど普及していないため、食材は翌朝まで置いておけず、その日の分しか買わない、だから朝ご飯は外で食べるとのことでした。

シェムリアップの近郷の産業といえば農業と漁業と観光です。工業はほとんどありません。アンコール遺蹟という世界にもまれな観光資源を活かすには、電気や水道や電話や街路灯などのインフラの整備、ホテルやレストランやお土産店やタクシーなど観光業への投資などとともに、治安の向上や地雷の撤去など一つ一つ解決していく必要があります。カンボジアは今懸命にこれらの課題に取り組んでいるところです。

#### 4. 壮大な大自然の営み

カンボジアがアフガニスタンと全く違うところは自然の恵みです。熱帯の気候は豊かな水と緑をもたらしています。シェムリアップはアジア最大の湖トンレサップ湖のほとりに位置しています。

11月の初めはちょうど雨季が開けた時期でトンレサップ湖がもっとも大きくなっている時でした。飛行機から見るとまるで台風の後の洪水のようでした。家々は水の中に取り残され道路は水没しています。水面の下には緑が見事でした。トンレサップ湖は雨季にはメコン河の水が流れ込んで乾季の3倍くらいの大きさになります。乾季には逆にトンレサップ湖の水がメコン河に流れ出るので。乾季は3メートルの水深のところは雨季の終わりには15メートルにもなります。

私達は臨時の波止場になっているところからモーター付の2艘の船でクルーズに出かけました。水面には手賀沼でアオコを防ぐために栽培されているホテイアオイが見えます。当然こちらのほうが気候のせいで何倍も大きく育っています。あちこちに数メートルの木が頭を出していますが、乾季になると20メートルくらいの高い木の姿に変わります。ヤシの木が一本も見られなかったのは水に弱いからだそうです。湖には漁師の一家が魚をとりながら水上生活をしています。小さな粗末な家が舟に乗っかっています。飲み水はトンレサップの水を沸かして飲み、汚物も湖に流します。

しばらく舟を走らせると、乾季でも湖のままと思われる場所に出ました。そこから先はなにもありません。海のような広大な空間があるだけでした。

トンレサップ湖は世界でもっとも淡水魚の種類が多い湖といわれ、その種類は300種以上年間漁獲量は10～12万トンにも上るそうです。

豊かな水はカンボジアに溢れんばかりの緑をもたらしています。道の両側にはヤシをはじめ色々な果物をいっぱいつけた木が茂っています。カンボジアが典型的な農業国といわれるのもこの豊かな水のおかげでしょう。水牛がのんびりと水田を耕している風景は別の世界に来た感じでした。

その豊かの農地にも地雷の危険があります。一刻も早く内戦の悪夢を清算して、新しい世紀にふさわしい経済発展を期待したいと思います。

## 5. 崩壊から守りたいアンコール遺蹟

アンコールの遺跡群は世界遺産として有名な12世紀前半に作られたヒンズー教の宮殿アンコールワットとそれから約半世紀後に作られた仏教の都城アンコールトムを中心にした数多くのクメール建築の石造の遺蹟からなっています。最も古い遺蹟は6世紀頃のものもあります。西欧社会がその存在を知ったのはわずか130年くらい前で、フランス人アンリ・ムオが再発見するまで何世紀も密林の中に眠り続けていたのです。内戦の間は観光客は近づくことは出来ませんでした。終結後やっとその神秘的な姿を拝むことが出来るようになりました。

一度見たいと念願していたアンコールワットは遺跡群のシンボリック的存在で、どの角度から見ても美しく堂々として期待以上でした。アンコールワットの中央部の足のす

くむような急勾配の石段を登ると第三回廊に出ます。中央塔を囲む回廊ですがそこから見る周囲の景色は見事でした。また観光コースになっている「夕日に映えるアンコールワット鑑賞」のプノンバケンの丘に登って、大勢の観光客に混じって暗くなるまでアンコールワットを眺めていましたが、夕日とともに彩りをかえていく勇姿は息を呑むようなすばらしさでした。

どの遺蹟にも彫刻が刻まれており神々のプロフィールとともに当時の戦争や生活のありさまがうかかえます。仏教彫刻とヒンズー教の彫刻が混在していて興味深い文化をかもし出しています。ところが長い年月の経過や戦乱による破壊や修復に十分な手を入れなかったために遺蹟が崩壊し始めています。

2001年11月20日にNHKの人気番組プロジェクトXで「アンコールワットに誓う師弟のきずな」というアンコールワット修復にちなむ番組が放送されました。アンコール遺蹟の修復には世界各国から7チームが参加しているとのことで、アンコールワットの参道の途中に日本の修復プロジェクトについて看板が立っていました。テレビ番組は日本チームの小杉さんという千葉県流山の仕事の鬼といわれた石工が修復活動をしながら次代を担うカンボジアの若者を鍛えあげていく姿を描いていました。カンボジア人の手でアンコールワットを守って行って欲しいという小杉さんの思いが痛いほど伝わって来る番組でした。プロジェクトが始まった平成6年以来7年の間に20回カンボジアに通ったそうです。



広い地域にあれだけ数多く点在する遺蹟を修復するのは並大抵のことではありません。おそらく莫大な資金と大勢の専門的技術のある人が必要でしょう。崩壊のほう及早いかもしれません。何とか少しでも長く今の姿を保っていて欲しいと感じました。

(2002年1月「手賀沼通信第46号」より)

# ニュージーランド（クライストチャーチ・マウントクック・ク イーンズタウン・ミルフォードサウンド・ロトルア・オークラ ンド）の旅

（2002年1月28日～2月4日）

## はじめに

1月28日から2月4日までニュージーランドに行ってきました。阪急交通社のTRAPICSのパッケージツアー「まるごとニュージーランド8日間」で、旅行代金19万9千800円、参加人員は全体で82名、3台のバスに分乗、私達のグループは21名（夫婦8組、男性2人組み、女性2人組み、男性1人）でした。

この時期、南半球のニュージーランドは日本の夏に該当し旅行にはベストシーズンです。お天気も連日快晴に恵まれ本当に快適な旅でした。毎日の行動もアジア旅行で何度か経験した深夜到着とか早暁出発という無理で無駄なスケジュールではなく、比較的ゆったりしたスケジュールが組まれていました。

一番嬉しかったのはツアー最初の日の夕食時に思いがけず誕生日祝をしてもらったことです。ツアーディレクターの遠藤さんから、「皆様の中に今日誕生日を迎えられた人がいます」との紹介がありましたが、「幸運な人がいるものだな」と思って自分のことだとは気がつきませんでした。思わず他の人と一緒に拍手をしてしまいました。ところが自分の名前が呼ばれたので、驚くとともにまごついたあげく、まったくインパクトのないつまらない挨拶をしてしまいました。誕生日のプレゼントにニュージーランドの国鳥キーウィー・バードの置き物をいただきました。65歳の誕生日を忘れるとはボケの始まりかも知れません。



## 自然の豊かさを満喫したニュージーランド

### 1. ニュージーランドと日本の類似点と相違点

ニュージーランドはとて日本に似ているところと全く似ていないところがありま

す。

似ているところは南半球と北半球との違いはありますがその地理的状況です。ニュージーランドの国の広さは日本の約72%、同じ島国で北島と南島からなっています。その南端は南緯約47度で北海道の宗谷岬の少し北といった感じ、北端は南緯約34度で日本の紀伊半島から四国を通り本州の西の端の関門海峡を結ぶあたりになります。一番人口の多いオークランドはほぼ東京と同じ緯度にあります。ツアーで一緒になった人がニュージーランドの地図を見ながら、「北島は樺太が北海道にぶつかってくつき、北海道がちょっとひしゃげたみたいですね。南島は本州を静岡と糸魚川を結ぶ構造線断層帯でちょん切った北半分みたいですね。」と書いていましたが、よく見るとその通りです。津軽半島や下北半島にあたる場所も見られ、宮城県の牡鹿半島のようなところもあります。

日本と同様、山岳地帯が島の多くを占めており、富士山よりわずか22メートル低だけのマウントクックが最高峰としてそびえています。日本アルプスの代りにサザン・アルプスもあります。火山や温泉もあります。別府と姉妹都市を結んでいるロトルアでは間欠泉があつて地獄廻りのような観光が出来ました。また水着をつけてですが混浴の露天風呂を楽しめました。

川や湖や滝も多く、日本同様、水に恵まれているという感じを受けました。

一方似ていないというか逆のところは、人間の数の違いと多分それが原因と考えられる国民の自然や環境に対する取組姿勢の違いです。日本の約72%の面積の国土に388万人が住んでいます。日本は約1億2600万人で、人口密度にすると日本はニュージーランドの約23倍ということになります。人口密度がこれだけ多いと、消費する食料や生活用品、出すゴミや排泄物、道路や鉄道、電気や燃料や水などの供給のために必要なインフラ、学校や職場や工場や病院などの施設、国や市町村や警察などの行政サービス、葬儀場やお墓や刑務所など全てに負荷がかかります。

ニュージーランドでは市内や観光地にゴミはほとんど落ちていません。ビンや缶やペットボトルが落ちている日本とは大違いです。自然はほぼそのまま残っています。ニュージーランドでは一日中バスで走っても、ひつじや牛や鹿はよく見かけましたが農作業をしている人を全く見かけない日がありました。ちなみにニュージーランド政府のホームページで調べてみたら、1999年の統計で、ひつじは4570万頭、牛は乳牛と食用牛を合わせて890万頭、鹿は170万頭と出ていました。

日本も100年後の22世紀の始めには、外国人を入れないときは人口が半分以下になると予想されています。23世紀始めには今の5分の1くらいになるのでしょうか。その時、環境がきれいになるか、あるいはゴーストタウンや空家や廃屋ばかりになるかは私達の子孫の取組姿勢にかかっています。

## 2. 豊かな自然と環境保護への取組み

ニュージーランドの魅力は何と言ってもその素晴らしい自然です。人々はこの素晴

らしい環境を守るためにさまざまな工夫と努力をしています。短い滞在期間に感じたことをまとめてみましょう。

まず驚くのが入国の際の食品の持ちこみルールの厳しさです。入国カードで口に入るものはたとえ薬であっても申告する必要があります。今まで、アジアに行く時はお酒のつまみや日本酒をバッグに入れて持ちこんでいました。ところが今回は添乗員から前もって食べ物はダメ、日本酒も税関の担当者次第で没収されるかもしれないと言われたため持ちこみはあきらめました。もし持ちこみ禁止のものを申告せず見つけた場合は200ドル（約1万2000円）の罰金を取られます。

人の入国についてこれだけ神経を尖らせているのを見ると、おそらく物の輸入についてはもっと厳しい検査が待っているのではないのでしょうか。家畜や農産物や土壌などに影響のあるものはまず入口で制するという考えが徹底している感じです。ニュージーランドは狂牛病や口蹄疫は発生していませんとガイドが言っていました。ニュージーランドの牛が牛骨粉など食べさせないで草しか食べないという理由だけでなく、病気の侵入にもきちんとしたガードがなされているためではないかと思います。また、ワナカ湖でモーターボートに乗ったとき、船長がこの湖にはブラックバスのような資源を荒らす魚はいないと言っていました。ブラックバスを持ちこむのは至難のことだとうなずけました。もっともブラックバスなど持ちこまなくてももっと豪快な釣りが楽しめそうです。

釣りについて言えば、フィヨルドランド国立公園をバスで走行中ガイドさんから聞いた話は以下の通りです。ライセンス（入漁料）なしの釣りは禁止。えさ釣りは禁止でルアーかフライフィッシングしかできない。35センチ以下の魚は必ずリリースする。違反者は最高5000ドル（30万円）の罰金とのことでした。これが国立公園内だけの話かニュージーランド全体の話かは聞き漏らしましたが、日本の釣り人のマナーの悪さと比べると自然を守りながらスポーツを楽しむ配慮がうかがえます。

今回のニュージーランド観光ではマウントクックとミルフォードサウンドという2つの世界遺産を観光しました。マウントクックではオプションツアーで14人乗りの小型飛行機に乗り、空から壮大かつ広大なマウントクックやミューラー氷河を眺め、ミルフォードサウンドでは遊覧船からフィヨルドの絶景を眺めながらクルージングを楽しみました。そこには人間の営みからもたらされる風景と無縁な自然そのままの光景がありました。ミルフォードサウンドへ行く途中、フィヨルドランド国立公園の中のトイレに立ち寄りしましたが、入口に募金箱がおいてあり1ドル（約60円）を入れるようになっていました。排泄物をヘリコプターで運んで処理する費用に当てるためだそうです。日本の尾瀬ヶ原でも予約のない宿泊は出来ないとか、毎日はお風呂を沸かさないとかの規制はしているようですが、排泄物を運んで処理するという話はありません。ニュージーランドの自然保護はまさに「ほんまもん」でした。

クライストチャーチは庭園都市と言われていますが、電線を地下に埋めて電柱はありません。牧場や丘陵には西部劇に出てくるような小さな電柱が立っていましたが、



都市部は出来るだけ電柱をなくすようにしているようです。

環境保護というにははばかられますが、各地でニュージーランドの原住民のマオリ族とマオリ文化の保護に力を入れていました。ロトルアではマオリ族のショーを見ながら夕食をとりましたが、これはオーストラリアのアボリジナルに該当する原住民で、独特の生活習慣や文化を持っています。オールブラックスが試合開始の前に踊るダンスもマオリの戦いの雄叫びをとり入れているようです。

### 3. スポーツとアドベンチャーの国

ニュージーランドはバンジージャンプ発祥の地です。バンジージャンプは足にゴム製のロープを巻いて橋の上から飛びこむスリル万点のスポーツです。バスの中でツアーディレクターの遠藤さんから「飛ぶ希望者はいませんか」と声がかかりましたが誰も手を挙げません。遠藤さんは2回飛んだ経験があり、「結構怖いですよ」などというコメントがあったのでよけいみんなしりごみです。見るだけみてみようとかラワウ川にかかるバンジーポイントでバスを止めました。橋から川の水面までは43メートルあり、見下ろすと高所恐怖症の私にとっては恐ろしい眺めです。

ちょうど中国人らしき団体客の二人が飛ぶところでした。一人目のジャンパーは怖いのか橋の上でもぞもぞしています。係の人に押し出されるように足から先に飛びおりました。それでも観客からは大拍手が送られました。二人目の人は大きく手を広げて格好よく飛びました。後で聞いたところでは私達の3台のバスの添乗員の一人が飛んだそうです。やはり一度は経験しておかないと真に迫った説明は出来ないのでしょう。大変な仕事です。

ニュージーランドはスポーツとアドベンチャーの国です。ホテル備え付けのパンフレットはバンジーの外にも、スカイダイビング、パラグライダー、ラフティング（激流川下り）、ジェットボート、グランドトラバース（小型機での遊覧飛行）、トランピング（トレッキング）、フィッシングなどの案内がほとんどでした。

ご存知のラグビーのオールブラックスは国民の誇りです。どこのお土産店でもオールブラックスのグッズがど真ん中を占めています。ここ数年お隣のオーストラリアに世界一の座を譲っているのが残念でならないようでした。

アドベンチャー・スピリットはバスの運転にも現れていました。ニュージーランドには日本のような高速道路はありません。その必要がないのです。一般道路の制限速度が100キロです。人口が少ないため渋滞はほとんどありません。ツアー期間中にバスで580キロを走った日が2日、540キロを走った日が1日ありましたが、いずれも予定時間より早く目的地に到着しました。60歳をはるかに超えている感じのバスのドライバーはとにかく飛ばしました。クイーンズタウンのワカティブ湖をはるかに見下ろす湖畔の道路は満足なガードレールもないような山岳道路で、悪魔の階段というニックネームがついているそうですが、そこを100キロ近いスピードで飛ばすのです。ハンドル操作を誤れば湖底に真っ逆様に転落します。ローラーコースターに

乗っているようなスリルあるバスでした。

私がアコムで教育部の顧問をしていたころ、ニュージーランド生まれの研修に参加したことがあります。ニュージーランドのグリーンベレーのような特殊任務の部隊に所属していた軍人が除隊して始めた研修で、日本の商社マンがたまたまそれに出席し、内容の素晴らしさに感動して退社し、日本版に焼きなおして始めた研修でした。私が出たのはデモ用の短縮版でしたが、屋外での行動をベースに、団体行動から何かを掴み取る内容でした。本番の研修はロープを使ってのロッククライミングや河渡りなどが組みこまれ、戦略とかリーダーシップとか意思決定などを養成するコースになっていました。ニュージーランドに来てアドベンチャーが日常茶飯事なのを発見してそのルーツに触れ、なるほどと感じ入った次第です。

#### 4. 日本人好みのニュージーランド観光

ニュージーランドの観光客は日本人がトップを占めているそうですが、もともと人口が多く、しかも海外旅行が好きな日本人が、観光客のトップを占める国はニュージーランドだけではないでしょう。過去の数字から見るとニュージーランドはあまり脚光を浴びていませんでした。

平成13年の観光白書によると、観光、業務、学術研究・留学などを含んだ平成12年の日本人の海外渡航先は下記のようになっています。

<u>順番</u>	<u>渡航先</u>	<u>人数 (万人)</u>
1	アメリカ	507.4
2	韓国	238.7
3	中国	146.8
4	タイ	88.6
5	台湾	84.5
6	香港	81.1
7	オーストラリア	70.0
8	シンガポール	58.5
9	イタリア	45.2
10	インドネシア	44.4
11	イギリス	40.2
12	フランス	38.9
13	カナダ	37.4
14	フィリピン	35.3
15	北マリアナ	35.1
16	ドイツ	33.6
17	マレーシア	26.8

18	スペイン	16.2
19	スイス	14.8
20	ニュージーランド	14.3
	以下省略	
	合計	1781.9

観光	81.8%
業務	15.0%
学術研究・留学	1.7%
国別の割合は不明	

なお対前年成長率はニュージーランドは上記20カ国中17番目でした。

しかし、少なくとも同時多発テロなどの影響もあり平成13年および14年は、ニュージーランドへの観光客の国別のシェアは大幅に増えるのではないのでしょうか。それだけでなく私の直感ではニュージーランド観光はここ2年といわず、これから着実に増えるのではないかと感じています。

なぜかという日本人好み、それも中高年好みだからです。私の独断と偏見で増加する理由を考えて見ました。

- ①日本人好みの豊かな自然と美しい風景がある。
- ②若者むきのビーチはないが、山や湖があつて中高年にブームのウォーキングやハイキングと共通するところがある。
- ③アジアと違って猥雑さがなく日本人の好きな清潔さがある。
- ④アメリカやヨーロッパに比べると時差が夏でも4時間と比較的少なく楽である。
- ⑤アジアやヨーロッパやアメリカに比べて比較的安全である。所持品に神経を使うことが少なく、夜道も一人で歩ける感じ。
- ⑥土産物の品質が良い。また値段の交渉に神経を使わなくてよい。
- ⑦南半球で季節が逆のため日本の冬にベストシーズンとなる。他の観光地との競合が少ない。
- ⑧他の観光地を廻り尽くした中高年が増えてきている。次はニュージーランドにでもという人が増えるのではないか。
- ⑨ニュージーランド観光を悪く言う人はいない。口コミで良さが伝わる。
- ⑩旅行業者もニュージーランド観光に力を入れてきている。



この予想が当たるか当たらぬか来年以降の観光白書が楽しみです。

(2002年4月「手賀沼通信第49号」より)

## 団体での海外旅行を楽しむための10カ条

旅は日常生活から切り離された時間と空間があり、日頃のしがらみや心配事から切り離された自由が楽しめます。旅は道ずれといいます。お互い心を開けば新しい世界が開けることになります。

海外のパッケージツアーは会社やサークルの旅行と違って、通常見知らぬ人同士の集まりです。そこにはちょっとした心遣いが良い雰囲気を作り、コミュニケーションが図れます。逆にちょっとした心無い言葉や振る舞いが他の人に不愉快な思いをさせることになります。そして自分も他の人から冷たい目で見られることになります。せっかく高いお金と貴重な時間を使って出かける海外旅行です。できるだけ楽しく過ごすよう心掛けましょう。

今までの旅行で実際に感じたことをまとめてみました。

### 1. 日本の食文化を持ちこまぬこと

旅行先の国々にはそれぞれの食文化があります。食事のときに、よく「この肉はかたすぎる」「辛くて口に合わない」「変なおいがする」「甘すぎる」などといって愚痴をこぼす人がいますが、そこは日本ではないのです。日本と同じ味を求めるなら日本料理店に行くしかありません。(それでもちょっと味は違いますが)

大好きなビールなどのアルコールも国によって少しずつ味が違います。違和感があることもあります。でもせっかく違った国を訪れたのです。その国の味を楽しむようにしましょう。

### 2. その国のマナーを守る

カナダやニュージーランドに行ったとき、動物や小鳥に餌をやらないよう注意されました。美しい環境と動物の生態系を守るためだそうです。ところがニュージーランドの屋外のレストランで食事をしていたとき、テーブルの上にあったパンをきれいな芝生の上に放り投げて小鳥にやっている夫婦がいました。おそらく日本での習慣が行動に出たのだと思いますが、芝生の上にはパンくずが散乱することになり、まわりからひんしゆくを買っていました。韓国のバスガイドさんから、中国人の団体はバスの中で飲み食いして床を汚すところぼしていましたが、それは中国人にとっては自然の行動なのかもしれません。それと同じようなことを日本人も外国でしているのではないのでしょうか。

また、日本の高校の修学旅行の生徒がホテルの中をスリッパで歩いているのを見かけたことがありましたが、事前に先生はきちんと説明したのでしょうか。

### 3. みんなのことを考えて

中華料理の円卓を囲んで食事をしているとき、奥さんが自分とご主人の食器に、運ばれてきた料理をたっぷりとっている風景をよく見かけます。普通はテーブルを囲んでいる人の人数を考えて、目分量でどのくらい取ればみんなに行き渡るか考えるものです。また旅行期間中バスの前のほうの座席をいつも確保する夫婦連れもいました。自分たちが良ければ他の人のことは考えないというのは、なぜか夫婦連れに多いようです。家では相手のことをあまりかまわないから、せめて旅行のときくらいは連れ合いにサービスしなければと思っているのかもしれない。

#### 4. 時間を守ること。勝手な行動をしないこと

団体行動では決められた時間を守ることが最低のルールです。一人時間を守らなくても皆に迷惑がかかります。また勝手な行動をして皆からはぐれないようにすることも重要です。幸い私が参加した海外旅行では全体の行動に影響するような場面には遭遇していませんが、以前国内旅行で一部不心得な人がいて添乗員が必死で探し回っていたことがありました。

私も中国に行ったとき明の十三陵であまりの人の多さに団体とはぐれてしまい、あわててバスが駐車している場所まで戻ったことがあります。バスも似たような車体でどのバスかわからず肝を冷やしました。中国の天安門広場や万里の長城も迷子になりやすいところです。ちょっと写真を撮るだけと列を離れて勝手な行動をすると、はぐれることになりかねません。

#### 5. コミュニケーションを図ろう

旅は知らない人同士を結び付けてくれるチャンスです。朝のあいさつや気軽に一声かけることによって、コミュニケーションが図れ交流が生まれます。旅も楽しくなります。難しそうな顔をしている人もこちらから声をかけると心を開いてくれることが多いようです。特にお酒の好きな人は話が弾むことが少なくありません。私も旅行中に知り合い今でも交流を続けている人が何人かいます。

#### 6. セキュリティに気を配る

フランスのルーブル美術館でモナリザの絵を見ているとき、混雑にまぎれてウェストポーチからクレジットカードを盗まれた人がいました。すぐ気がついてカード会社に電話して事なきを得ましたが、カード番号と連絡先を控えていなかったとしたら慌てたことでしょう。パスポート、お金、クレジットカードはセイフティボックスに預けるか肌身につけるかが常識です。パスポートのコピーや予備の写真も持っていきましょう。お金やスーツケースのキーなどは2カ所に分けて持ったほうがいいです。お店から外に出た後財布にお金をしまうのは厳禁です。部屋の鍵は2重にロックしましょう。

セキュリティ検査にも気を配る必要があります。ニュージーランドでスーツケース

がお土産で一杯になり小物入れをナップザックに入れたため、見事手荷物検査で引っかかりました。ワインオープナーが犯人でした。

## 7. その国、その街、その国の人を知ろう

バック旅行は観光がセットになっている事が多いのですが、時間があればできるだけ多くの名所、旧跡、博物館、美術館などを自分の足で見て廻ると旅の印象が深まります。そのためには好奇心をもって、「面倒だからいいや」ではなく、「面白そうだから行ってみよう」で頑張りましょう。

できれば旅行先の国のあいさつの言葉を覚えて、現地の人との交流を図る事です。日本語を話せる人がいる免税店だけでしか現地の人との会話がなかったというのではあまりにも寂しい話です。ちょっとした英語やスペイン語や中国語が話せると交流はさらに深まります。言葉が通じるだけでも楽しくなります。

観光バスの中で居眠りをするのは日本人が一番多いそうです。ある大学の教授が、「観察することと考えることはタダ」といっていましたが、せっかく外国に来て道中居眠りばかりしていたのではもったいない話です。私もビールやワインなど飲んでバスや列車に乗ると眠くなりますが、できるだけ我慢して外の風景を楽しむようにしています。

また訪問先で観光客向けのイベントなどがあるときは、恥ずかしがらずに参加すると思いが残ります。

## 8. 記録を残す

皆さん、写真、デジカメ、ビデオなど、思い思いの方法で記録を残していますが、ちょっと手間をかけてメモをとっておくとさらに忘れがたい旅となります。旅行は計画し準備する出かける前の楽しみ、観光や交流やご馳走などの旅行中の楽しみ、ビデオや写真や記録を整理したり眺めたりする帰ってきてからの楽しみがあるといわれます。

次の旅行の参考にするためにも記録を整理しておきましょう。旅先でもらったり集めたりするパンフレットや書類なども捨てないでとっておくと、思い出になります。ホテルには無料の観光地図をおいていますのでもらっておくと役に立ちます。

## 9. 事前準備を十分に

出かける前に十分な準備をしておくと、現地についてから「しまった」とか「知らなかった」ということが少なくなります。

私の場合、旅行を計画するときは、その地のベストシーズンを選ぶようにしています。ベストシーズンは人によって感覚が違うと思いますが、冬は避けて、なるべく暖かく、遅くまで明るい時期にしています。そのほうが荷物が少なく、また遅くまで行動できるからです。年中暑い国の場合は雨季を避けて乾季を選びます。

準備は旅行会社のパンフレットを見たり案内書を買ってきて読んだりするのが一般的だと思いますが、インターネットを利用すると詳しい上にタイムリーな情報が得られます。旅行会社のツアーの内容や費用の比較も簡単にできますし、申し込みも簡単です。現地のホテルの設備や現地の天気予報、気温などを簡単に見ることもできます。

## 10. 健康に気をつける

健康に不安を抱えながら旅行しても面白くありません。旅先で病気になると途方にくれてしまいます。私も過去二回そんな経験があります。旅行の日程の直前は体調に気をつけてください。

常用している薬を持っていくのは当然ですが、下痢止め、胃の薬、風邪薬、きずテープ、虫除け、かゆみ止めなども持っていくといいでしょう。アジアでは水道の水が飲めるところはごく一部です。ヨーロッパの水も日本人には合わないようです。旅先でいろいろ食べてみるのは旅の楽しみの一つですが、自信のない場合は現地のガイドに相談してみるのもいいでしょう。食べ過ぎ飲み過ぎは要注意です。

旅行障害保険は必ず入りましょう。持ち物がなくなったときにも役に立ちます。

(記念誌作成時は手賀沼通信未掲載、2005年10月第79号に掲載)